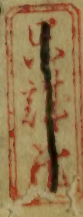
子名所圖會 戯庙之号 天

曲亭馬琴先生戯作
畫者　歌川豐國子摸寫

戯子名所圖會

全部三冊

曲几弄形擢世塵
亭窓月照野雲心
馬蹄煙裡罩楊柳
琴書既思一老身
右録
曲亭馬琴翁讃
京山傳人

自叙

太極静まりこの名。天ハ三光の観相あり。地ハ三形の絶景多し。遠ハ潆土を更かきといへど。須磨明石乃月影を引窓より得るか難く吉野龍田の花紅葉を鉢植ふそうにようし。口ふ一杯の麦飯を喰ひ。足ふ三合の肉刺を端出し。幸ふしく山川ふ移りぞいふとも。鳥渡それ〳〵の益あらん。近く是を求まれバ。錦ハ眼鼻の名所あり。脊に七九の灸跡あり。鯛乃名代八庵丁家ふ称せられ。菌乃名不も葛西ふ高し。

猟人は吾がなかにも名誉を知れり。偏目は我ならぬ目医者
を知る。巨燵弁慶門の犬。尾をふりまはれ雙六ならで
京へのぼらざる、。痿痺は劣るの譏も有ども屹然
として八方を辯じ。安然としてぞ四海に遊ぶなれ
皆書画の切なり。これを以て近ころ世に行る
都名所圖會に倣ひて。戯子名所圖會を作る。
所謂盲目の探書といへども蛇に怖ざる田夫山妻をして
然に此書を熟覧しく恋しうして後戯場に捨んで。彼
一番叟よりはねざるの梅ならんとの類。よそ猿のうへ

素人落を後にせざれば。歌川豊國が草紙備く賣物に花を飾て。志らも招牌に絵かれ。鶴屋が本鄽比正戯廟に掲じく。一番京気をみえる事になん。

寛政十二年庚申孟春採筆於飯顆山草堂

曲亭馬琴

戯子名所圖會巻之一目録

曲亭馬琴子編

三座臺濫觴
勘三樓興基
櫓山
三座舞臺
糶出島　丈广鷲祠
桟敷ヶ嶽
囃子町
中二界　三階松
番附神
市村竹城之訳
鼠木道
大臣柱松
土間内海　大首沼　歩橋
韓桟敷ヶ嶽
稲荷町
狂言之山
芝井碑
森田神宮之傳
留場仕切場関
羅漢堂
切落札辻子
樂屋洞
頭取部谷
新浄瑠理坂

凡例

一此書ハ三勾欄戯棚山棚戯房よりはじめて梨園子弟當時名ある紀山川草木を撰み出し。且画圖ハ摸写しく其風藝乃役しるも。今古泥しるべき此狂奇發句あれバ。悉其倩り挙出せり。その余諸人の為を記ざるものハ皆撰者慢の悟ところしるべし。

一此路ハ措記しく次第を紀がぬく。又おのづから次第ある小似たり将校する末流の子弟ハ。直小老俳優の後よ居ら去むるとあるべし富士を畫小孫山を添る類ひあり。其條の小字。際伝あらざるを記く蔵ハ載せず。是観る小風景多く去て。図画の功

あくざれハなり。

一　近ごろ高名の俳優といへども。今退廃してその迹なく。又ありといへども。その名のいまだ聞へざるもの、ちかき不載所謂秀鶴寺。十町畷のほとりにあり。又十字街鳥の中洲ハいまだ小地なれども風景をかしといへども。今く古跡の餘波あるか。名小未出せり是名所と号るの大意なり。

一　此書に洩れたる當場の俳優をもあるべけれど。菊之川菊之の洲。魚楽村。雷公社。濱蔵川。蟠凬谷。其外許多の諸名所を始く後篇にゆづりて實に洩たりあるいハまた洩さるをもて拙しとするをまぬかれ。初編ハ上中下乃三

幕に隔るが故に已ことを得ど二艶仮の後篇にのこせり。

一 六代目市川三升主ハ去年五月十三日物故をとげしかバ。此地ハ東都俳優第一の名家となり。且三升寺世を早うせしを惜める白猿隠居も中の巻のはじめに出せり。猶七代目お続の縁紀ハ後篇に書載るべし。

一 総くの名所古蹟去より秋まで只の風景を写せるか由来に。艶仮よいふりてハサしづれ古蹟をおろん。猶よしやおぼろ川の瀏瀏いさゝのかハりわありとも故事を深く穿しきを知るもれハ此書わしく戯子に益の

一

名所圖會なり。彼一年限の評判記とハ同じからず。

本朝俳優の名。神代の巻に出て其の由て来ること久し。或ハ大古俳優伎と称するものハ。今の戯場のはじまりなりといふ説あれども。争かその源なくして。よく其流を汲むものあらんや。文治のむかし白拍子などゝ称せし女楽。この戯子のたぐひなり。今の戯場ハ永禄のころ名古屋山左衛門といふ者をはじめとす。又唐土漢魏六朝より。楽府と称して行ハれしハ。この詩賦をうたふて舞しことあり。こゝに本邦の白拍子が。朗詠などに合せて舞しも同じかるべし。唐玄宗皇帝の時。伝奇院

本とて院本の鼻祖とはいへども。全備の風姿を宋の五花爨弄の舞より起まり。しかして後。元明にいたりて。勾欄戯子といふもの出来て旦小旦生丑。両脚浪子于諢。穠口技に至るまで。その形勢本邦にのこることなかりし。夫花鳥風月八倍客へ向ども。千山百川女児の目を驚かしたりし。只戯場のみ雅俗ともに老若ともに鬱をさんじ楽を遊ぶるの佳境。風流第一の名所なり。

七
戯子名所圖會増補之巻
眠獅堂風景之圖
吉田山
著作堂

眠獅堂
雛市之圖
狂言爪長持
長右衛門が帯たんす
大入
五右衛門が束帯雛
金太郎ねごろふ

上々吉化粧六哥仙
小のふ

眠獅堂　獅子ハ百獣の王。眠獅ハ俳優の魁首。尚亦ら
小夜嵐三衛法師乃開基として。既よ七代よ及ぶとかや。本号ハ
京坂の親玉也末。京浪速の老若挙て信じ奇依せり。堺
内三郎よりとりて廣く。小六洛の古迹。扇の手を見れば
京中の好みとして。見る人目を驚さざるところなかり。其
風藝乃奇く妙ありしてすれバこまん人の志る所なれバ。
載せし。今の眠獅堂ハ。去る丙辰の年三月より二
代の名をつぎなり。遂よ親の光りをうしなハずして
人京おもふていと許さる。されバ去りし末の名く。藝堂
建立乃ことゆ東都よりり。先人受授の玉を捧く江戸

の親玉よ御じ其の餘光を以て諸人愛敬の守を弘む。
ここに於て江戸子忽ち贔屓合師の押ひとなし。
叶の字所を書附して三升の門を建たり。依て成田山
の贔屓堂と呼び做せり。堺内に四季の雛市あり。斯
辺の桟敷十間店をうち通し。日くらしもがるゝまで群集
を六歌仙に五右衛門が束帯姿の雛人形ハ。五人捐ぬ名入
うちて。裸小僧の金太郎ハ五人囃子のはやしかたよろ
しく。本蔵が巻物竜。吉右衛門が烏帽子箪笥。伴左衛門が上下着
羅よぎんさり纏る狗のもねそ。ひり雛助の道具揃。
一俳立まりの高上りしぬこそつぞ　猿丸門　狸雛助ハ。

雲悪一對の立ものかりと。早く眠獅堂堺門の名物となりけり

樵夫あり僧あり花れ六歌仙　顛今太

鶯や雛壹の奥り高音啼　羅文

一寛政十二庚申年三月廿日野塩流派の古迹とすて同年三月廿九日岩井山杜若堂古迹とする事

一同年八月より森田作座して地主神とあかりし河原崎再び座の縁起ホらゝ。追て増補の部へ加へつ出し

一新たり役名の役者ホ有る所ハ年々増補してぶり出しけるゝお都々ぞ御求ニ預り可下候

板元　仙鶴堂

日月燈江海油風雷鼓板天地間一番戲場堯舜旦文武末莽操丑淨古今來許多脚色

三座勾欄圖

戯房後門圖（ぐやしんうちのづ）

三徑秋花裛露新
重携酒伴過城闉
只應夜夜西江月
留照筵前舊舞人

朱彝尊

芝居三座の臺に祭る所の神。本朝神楽の元祖天鈿女命也。酢芹
命曽我大明神なりして。今ハ生且人惣氏ゐ紀屋となれり。○曽我祭りの因ハこの巻に
おせり　芝居と名づくる事ハ蔵書に云むかし南都南円堂の前乃
芝原に三株の草生けり。形土筆に似たれバとてこれを称云つく
と名づく。又翁草千載艸と唱へて。是三番草の権輿なり。後世名古屋
山三といふもの。此草を小野小梅ちやし。後四条河原にうつしも。ある時
この芝原忽ち枯て二ツの井戸となる。水源東方に流れて絶ず。さ
陰なり。是江戸三芝井に起原なるべし。人来りてこれを汲て
見るときハ憂を払ひて歓を迎へ。悲を捨て楽に逢を遂よ命
の洗濯をなしいかすてふ。煩悩の垢をわすれり。人こころ

金銭を投ぐれバ泉忽ち漏出る縁なき者ハ此井の中を覗くこと許さぬ是を以て後世俳優の名あるハ水ふかゝさゞる。市川瀬川沢村小佐川佐野川中嶋あり。又筆屋小橋の字あり。皆此謂ぞ。今ハ芝井と芝居に書習ハり。是等の緒説甚ぎ杜撰なり。妄りに信ずべからず。

勘三楼　開山猿若道吽庵人。寛永元甲子年二月十五日当山を開基して一ツの楼台を建立せり。これを檀家の勘三楼と称す。三株の神木あり。その樹を櫟木と呼ぶ。今ハ絶てなし。出雲の勅を巫女お国が寄せの名木なり。勘三楼の櫟木ハ形銀杏の如く梢よりて纏く。その不乃名を婆銀杏と呼做せり。葉に中ありとらふ

村あり。この村に二代目の明石といふ奇石あり。令此麾猿若の衣裳。翠簾の総角新発意此太鼓に。当所の霊宝なり。元祖猿若勘三郎のはじめ。寛永元年より今寛政十二年まで凡百七十七年。帯刀御免。萑堂院冠子名人より代々に相続して。今既に九代に及べり。

稲級の鶴も千とせを舞として汲の幕引猿若の浦　己克亭　雛忠

若はそふりしや哥舞妓の猿若も　其角

行之城門。此にこれを橋の門といふ。寛永十一甲戌年。村山といふ人晃て市村の梵城を造る。城門を羽左衛門と号く。今八門をうりお繽して城の沙汰なし。神木の株木橋ま似うり。嬉きやある

といふ鳥此樹に棲ぐぶにやふくと啼る後地名となりて好きやと云。此
市村と呼做せり好きやなると名づくるといはざる中にて或は鋲ぶ由云ふ
咲矣と書り。又一説に此邊の家居ことごとく富貴なれば富貴家といへる
よし方底の蓋物語にみえたり。此幕の弘戸帳。道具建の三行具足
等は此村よりはじまりといひ傳ふ。又街道下といふ村文堂の什物く
寛永十一年列當村山本創のはじめより。今寛政十二年まで凡百
六十七年。何江院家橘名人その名世に高くきこて。今十代お續なり。
橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどましく常葉の樹　傀儡子
れやくしふをすなりけり　作　の連　宗因
森田神宮　今は中器にしてうんやといふ　万治三庚子やとし本郷を清といふもの。

龍鐘莫怪樽前客
子弟梨園皆白頭
朱竹垞老人

師竹菴吾山

ふ思儀の霊夢によりて此祠を建立して一ッの仏舎利を納の
狂言堂に安置せり。神木の株木酪醤の異名に似たり。此樹をと
こぶしるといふ鳥棲て常に啼きやるの如し此る人は嬌く
来ることを求る者に嬌来るとなづけたる狭つまで知るべからだ。
親文杜光残書賀尉より今の狭名において既に九代万治
三年より今寛政十二年まで凡百四十二年に及べり。
猪のそでく建し木挽町桧舞台のかんやうら幕　雛忠
櫓山　この山三所あり。山の勢四角にしてまよ雲の幕を帯たり。
乱すさ道　うしろハ縄張闇夜坂なり。此辺に居る人こゝ立とまらに
聞ハ西敷に木戸まよりふるありて切までく十六文くと常にこの前には

川越多し。此所の風俗人の名を呼ぞ。只羽織さん合羽さんといふて。その形を以て人の名とすることなり。是縞さん紺さん中紫さんの類あり。都て片鄙に古人の遺ることこれらにて知られたり。

留場仕切場関　鼠木道の郷にあり。切手これなければ此関を越がたし。

三座舞臺　世にこれを尊舞臺といふ。傍に大臣柱の松あり。此松に色々の古木ありて時よりて梅となることあり。桜となることもあり。通天の橋でハなけれど。さまざまの樹に変る事今古希有の名物也。

羅漢堂　大臣柱より西のかた。みしりこみて小暗き所にあり。桟敷端損者。土間でも損者といふ多の利益を違。此所に安置せり。

糶出浮寫　此邊に引道具の機あり。むかし正徳のころ。樋口半右

三座戯宿風景圖
桟岩ヶ嶽
三座茶屋

川舟
簗場仕切場図
そしをりの橋
切岸の札の辻

恋つといふもの作り出しける島なりといふ。此土地の人地から所く
生くある。古今稀なる浮島あり。
文摩就ぎの宮　舞台の正面かしりこゝる所なあり。形也燈籠乃
ごとく。桟敷をと云へハ忽ち庭となり。庭をとおり人ハ能景となる。
此辺に幕梨子といふ梨の樹あり。きぐ目まぐるしき風景なり。
花道畷　出端国切幕郡の畷なり。端の里の揚といふ名高き
長揚あり。
土間内海　此辺より覆首沼までの小揚とすべて昔の桟揚し
いふ。その歌田の畔もごとし。
切落れ辻子　此所は火縄屋半兵衛といふ茎町あり茂みとる

ふこゝ暑しき難所あり。當ふ土尾より岩相に似たる尾長鳥あ
まくあり。多田の瀧路の瑞路松風の色ふよしてごくくの
清水草羅の口より流れおくぞその色茶比如し。世ふ中風田と云ハ此邊。
布子 見てく 夏より 暑し 桃 乃 ころ 見せ代

桟敷ヶ嶽　この山四季ともふ花りしぢの名所おしく。又ハ夏から
べら席のぬく。紅葉ハかけちらしたる毛氈ふ似たり。下ハ鵜川
名有ふく西川東川とふ両流れあり。平間鞍華落大まてらし滝物
の名人七八間打抜しといふ大傳の的石ありて。宮サ三猶あるりびとく。

韓桟敷ヶ岳　高山なり。いかなる耳のちかき人も此山へ登れバ只口あかずて
ばかり見へく。寿真定ふ咲えぞ。故ふ韓の名あり。二月社日よ酒を飲

く。此山へ登れバ眺望よし。杏林詩話に見へたり。此辺に引舟多し。
楽屋洞　舞台の浦ハ總名なり。幕の内・楽屋・鏡などの外名所多し
囃子街衢　むかし寺のうしろに有り。花林といふ林の中に斉唄
井といふ名水あり。この水を飲バ声の立をよくするの庭より遠望。
三味山　鼓が淵。笛淵。大鼓岩などいふ名所多し。
稲荷街衢　平輩天皇の陵ハ番附にのせる森此中にありて此辺
より前紅原といふ原へ出るなり。
頭屋紅谷　此谷に高紅帆にあり。紅衣ハ此処の小祠なり。ゆへ
夜前社料としく荘厳庄一ケ村を領ける。神体ハ頭屋といふの
発香をとめのありしといひ伝ふ。この谷より紅を出せる。

豊後梅之圖
うぐひすの互よ
聲やうらぶ山
少女 さと
戻駕色相肩

中二堺三階松　小山の城ハ。立薬師敵薬師の半堂縁起舊跡ハ多く
二之の巻ニ出す。抑當所ハ武藏の丼丸体是所ニして。或ハ女と変
じ。あるひハ男と化し。老たるを忽ち嫩ぎ。若も都て白髪をいろ
づく。実ニ風流の藪澤ニ花の仙崫なり。三階松ハいつも老せざる
えを特ニめでゝ花仙木といひ伝へたり
狂云の山　此山紀志の峯より縦耳出す。世界をむすぶと見る人ありしと云 からきりそやうりむすぶと誤りて云ば止
四番続の間道あり。これを狂云筋といふ世界定といふ所より此漾
漾といふ漾布を出せる。おく古きものを漾ふ人てをなり。稽古の
漾を就む八物慶井ニ出る。此道しるく急ぬしく苑ありける
时よハ一夜づけといふ漬物を売る家あり。その漬物ハ荇と数へて

世に芹鼓漬といふハ口抜取れ一口づゝ喰ひかゝる漬物なり。

新浄瑠理坂　豊後梅の名木あり。秦の始皇の松と同格なくこの梅にも太夫の名あり。薬ハ文字葉留本薬の二葉にまされて生茂まり。此坂を羽川名見浅屋沢といふ三絃三筋の流れを結びけり。

番附神　三座櫓下より出る神前之神体ハ今日が初日蛇といふ蛇身之と云

芝井礫　此碑碣ハ褒言羽院の御宇貝連中先生の建るなり。形編笠のごとく井垣扇の骨に似たり其文ニ曰

蓋惟ハ芝居三座の社ハ弥郎菜師の本地佛にして浄瑠理幕の喜見城寛楽自立の霊場なり。無常の焼飯ハ盧生が粟の飯に等しく一日に数年をおくるし。去ゆゑれバ秋とこの

戯棚脚色圖
夕立の雲

天地乾坤一
箇箱暑寒来往似
韋綱
東西口上百
千鳥
花咲老爺唐
雷ハ上であゝずとちくしてゐるぞよ
雨のあしまろ
足おとのこづま
生旦倶貼脚色巧
淨丑科諢撒潑夛

夏かとおもへバ冬となる。指に白からぬ花を添てハまさへ見ぬかゝれ程
云をたづぬ。風寒からぬ雪を見てハ、空ま志られぬ黒雲を疑ふ
白扇ハ吾妻の桐紋より車軸と流し。月日星ハ竹の簀れ天上
より婦ふさがる。霞ハ雑しく海参をならべるがぬく。浪ハ長く
くへの字を並ねるに似たり。あひよくの烏羽糸の工合まに学
ぶ。売らるゝくの鬼火最酒臭し。馬ハ滑ぐ人を乗る。牛ハ
おゆもしく抱もて這入る。張竈の茶碗ゝれる家つらなく
はかなき縁の飯鉢ゝたのしみ大厦高楼のかざまり忽ち寂寞
たる田家とこの字諸人群集れ市中も。終に変じる山林と変ず
下結居くあやく八まさしく庭かとおもへバ補あでへつ居て。

総じて此貧家とみれバ奥の一間へ居る人。五人でも三人
でも。又出て来るも志らぬ顔が多し　扨も色情ハ女にも持り。
悪事もあらバけ大声ふて密結を甘ふ入錦繍を身ニ纏ハ
しも忽ち襤褸ニ尾羽打枯しも生死流轉の拾まハ月日
のねづミ。喜怒哀楽。盛衰終一時を争へてこゝに移く急流れ
群集。信心忽ち擔にめいじ。或ハ多し三。或ハ鉤ふ彼陰奥ふ
あをくいふ。私大よかるねども。此地の正月廿年をげて十一月の
朔日ハ例の元日なりこれ周制に寺とふもの類。先識らふ
その全盛をつくし。積あげる蓬萊の山巌をなしくよし　燈
錦田の花のいろを一夜の間に栽らし。居ながらくたる天水桶

曾我祭禮之圖

曽我の社
羅文
曽我大明神
芝居中
又一説に曽我狂言の
はじまりハ延宝三年五
月木乃町山村座にて始
めて曽我これをはじめ
其後天和二年五月市村ニ
て五人女貞享五年
三月中村座にて
曽我狂言より
吉例として今ニいたるまで
春ハ必曽我をする事になりぬ

の水蒼々として。ここに映ずる挑灯は。田毎の月にも劣らず。梅に柳にさくら。杜丹立役敵武道。一度にひらく造化の幕なし。軒に輝く惣抜の燈籠細工は。長安城上の春の夜もおもひ出され。春宵一刻價ある友役者の名まで花やかしく。乗込の懐にむすびて手を拍は。百千の雷も一度に落るかと疑はる。一番太鼓二番鶏をまつぞ。三番叟四ツ頃の鐘に先だてり。家に群れ来る楽屋雀。一のしたに飛ぶ新の鳥。打抜の摘て餌を撒ぎ。竈揃の窓棋に徊を浮し。宵よりぎつちりは楽堂に詰る小役清めのおかめ水。茶屋が贔進の幔腹は虎屋の祝儀店明番。ゑいやまくもげむいちぶ乃経

功徳ハ請仕の元正月一夜に来れる常しき。桟敷ハ石段を免さ
せし。利生ハ目々に新たなる。丈ある舞ハ人の見るにおよびて
を増るとや。一ッびこに歩みを運び。見る貴合鄕の衆ハ痨
痎氣欝の諸病を治し。藪入娘の身丈を伸るを。鳴手ある
といふ顔お妙とせん顔蓋一面の石に勤しく。永く三番の千歳
まり待ん給ふ云。

呼ののむりし天の磐戸 ㊤
松代たてとの色や世に

目に正月の花に躍しと ㊥
植毛のみ了永く待へよ ㊦

戯子名所圖會巻之一終

新撰戯子名所圖會

生淨之号

地

戯子名所圖會巻之二目録

曲亭馬琴子編

市川山三𣏐堂
市紅院團像
高麗山錦江仙人栖
彦三祠
高麗寺金𣏐水
嵐山三八堂
簑助稲荷
大友杜
海老藏寄所菴室
團三樓子藥師
中車寺笹輪堂
尾上松
坂三津塔 後荻野よう〳〵く伊三の塔とあらたむ
瀧野谷四楓
德治山
友藏主艸菴

荒五楼新三升片

江戸之鼻
江戸見てハ外よ
名所と
団十郎が
三月

市川山六世の三舛主ハ去歳五月十三日就木く。皆誉自到本刹と六字の碑式わぐれ。
春秋まだ廿二の石碑とあわれ。是をとりて當寺ハ姑空曠乃地ゆ似うと云
どとこの地ハ東武俳優家才一の名所なりよれハそろて俳優隠居を擁
嬰しーく。中の老ゆかしられ居ゝしもとの令く名の著しき大役
ある不可思議なる街地なるが故なり。於七代目お僕の縁起図説ホハ。世書の後編ホ
著はすべし

四国六十六部
五葉牡丹

市川山三升堂　本尊成田不動の写ハ戈牛沙弥の作にして。栢莚老人の帰依佛なり。團十老。五粒院白猿隠居吉人三升主まで。於て六代の名山なり。今の海老蔵寄所に至る七代目におよびて栢當山ハ。寛文延宝の比。元祖戈牛名佛覚栄開基の霊地にして。代々鼻の名所となる。世にこれを紙おし戸のしるしと賞翫せり。実に見へ負合経諸人も愛敬の名山なり。境内の名木奇石甚だ多し。三座傳来稽乃肖像ハ。家の藝堂に安置せり。元これ栢莚家袍の内侍乃守本尊大たから左馬丞の建立なり。座頭の兜六代乃大立物。今ハ覡の妙神と崇め奉る。神木の角桂ハ。その名稍と共にたかく。霊宝の荒琴ハ。その曲異國まで鳴ることあり。當所

不破の関ハ三升の門はるじ名とかや。延宝年中乃造営ニ
して稲妻の名所なり。

稲妻ははじまりたてるも不破乃関　其角

後ニ此稲妻でひく門となる。是は三升の門と云ふ地中
ニ助六の八枚寺あり名物は江戸むらさきを染出す。寺内
ニ蛇乃目は傘塚なり此辺五葉牡丹の名所なり。去年三
月廿七日海老蔵ニ十三回忌ニよりて。古人三升主時ニ九十二才
中村ニ於て宗はと古今無双の繁昌世にかく翁なる所也。
三升老夫の別荘ハ。家は蔵玄堂の傍ニあり。此所より小田原の
外郎売を初しも。多吉の流儀門ニ。傀儡石といふ奇石あり。此堂

のうしろに竹抜五郎の竹藪あり。此邊の土民今も矢の根寄
乃先祖を掘出すことありといふ。鳴神上人の行法堂乃遊覧。袴
袴が塚。景清が牢破りの古跡ハ玄粟原といふ原に残る

景清を花え乃森下ハ　七ゑ清　ちぎ紙

京清とかきれし業のゆかしへ家　文麻呂

當處代々俳諧の風流を好て其人の耳に留まり。元祖戈
牛八戈麻呂が門に遊び。二代目楠莚其角と時を同じくむ
秀らう澄昔何がしが鳴に於とむきし時楠莚がりとく誘鸚
辛子をなして流るかと思へりけれバ

松の杉魚きかてなとふ乃辛子かな　楠莚

是等ハ當意即妙感慨の名句といふべし。その外當所ハ珍話名説多しといへどもくだくしきをいはんも敢て仏学者に似たれバさし扣略ぬ。今の白猿隠居ハ狂哥俳諧を好みて。是又風流の一傑といふべし。此外當所新古の什物。久米寺の鑷塚もまたのかつら石六部乃笈。男之助の鐵扇。うそふかれ遑なし。市川流は絵当筋熊などいへる禽獣ハ此山より出るといふ依て團十郎仙袂。團十郎艾ハ。三升寺門前町の名物なり。

○三升堂十風景

大太刀ノ月　助六ノ櫻狩

外郎賣百囀　不破稲妻　鳴神瀧壺

時致矢根岩　久米寺鑷塚　三庄太夫老坂

是より市川ごろち
極上々吉
市紅院團像
團三樓子薬師
友蔵主艸菴
荒五樓三絆井

鶏鳴自起束行装
同伴征人笑我忙
却更有人忙似我
蹇蹄先印橋上霜
李笠翁
市川の流

景清坐行松　六部深雪

今こゝ丹團十郎や鬼は外　其角

天狗何ぞ十郎がくら乃山　京傳

海老藏寄所菴室

當寺子役の守本尊として。三升堂の境内和泉山乃麓ふ安置せり。事ハ三升堂の縁記ふ見へたり。

みけりまそや元わしぬあの節　其角

市紅院團像

立物のむかし。市川流の大地にして。元禄年中乃建立今三世み及べり。市紅院の門ハ。むかしハ門にて正德五年より額のごとく一丈字の関楗を掛られしが。享保六年より又関楗をとりて元の門となること人よく知るところなり。當寺の團像佛ハ。く

中嶌寺筵輪堂
尾上松
志ら藤や
雲に又なる
夜の雪
羅文

笹てん堂
うれえひづきの松
実方雀の宮
三舛の門

此時より賣らじ免たり。かゝる本の嘉実琴ハ稽八。吉力市の子
瀬ふしく。市川の流まハ今ふ此所ふとゞめけり。
市川やきびしく打よれ渋鮎の細くとなり大きくもなき
市紅院の前立不二山の僧正乃継ふしと。躍

圓三樓子薬師

の上ふなん比建立。古今寺妙乃霊像なり。

中車寺笹輪堂　市川の一流。元祖定花山八百藏主乃建立ふ
して。既ふ三世了及ぶ。今比笹輪堂ハ。沢村の金平小僧。了び
冬瀬川の水ふ垢離をとり。変生男子乃法力をゑひ。忽ち
小山ふ一切切りきて。市川の流ま六代堰入まし。絶ける中車寺を
再興せり。当流早那ふち。若流の勘平大串の鉄炮を納めく。

淺草が竹林には。評判の高藪を建つらね。是より高上にもとりのげ作
を越ぬれバ。古手屋八郎兵衛が墓所の石燈籠にも。此道の光を増し
く。助六の揚巻より安房上総のけしき見せる築山あり。忠信
の屋敷跡には。源九郎狐の祠を祭り。実方塚の雀は宮には素湯
乃見物ぬちらく中車と信仰起しむ。らんれ座頭の三味山ハ
贔屓の木戸にかれて。當寺女人の帰依佛なり。

爪先立て横より顔をの大入を蟹の真似ぬ八百萬にて
冬ごもりて　まつ乃たちわりや　女惚まし　其角

高麗山錦江仙人栖　松本三佐の名山あり。山上に錦江仙人
の庵あり。繰く吟ぎ仙は得てにて三つ銀杏を立てて衣とし。

高麗谷父子山圖
いてう山
花びし山

去来

四ッ花菱を結んで帯とすも。年七十に及んで能をおとろへ
ず。或時ハ尺八は雲を起し。又あるときハ無何の事ある云ふ
結ぶ。重忠が琴責の松ハ。千家の茶は湯流にあり。帯屋川ゑハ
長右衛門が名を残し。比翼塚ゑハ長兵衛の切を止む。世話時代
何でもやらぬの森ゑハ。眼が梨の古木を残し。當示やらふ祢の祠
名。此人一番に鳥居なりといふ。
能ハもや命かぎり乃　鬢かりら　東圖舎
嫩く聴てこその切り頃ぞふおもかし中もおもは鳥　桑揚庵光
彦三祠　當社坂東山新水院に法座あること既に三世なり。三座
考曰。市村太夫元成以二血脈之児一再二與之一云云此堂を年織し

流行出しく。諸人悪敷の守と崇ける。石の鳥居ぎはなりと號
付て。舞台がおりしとなり。梅幸気鳥といふ太鳥山祠の穴
しめあり。敵役を信進の内に罸利生がよく見え流宣乃
団扇紙にかれども。聾棧敷の上までも。小男鹿の八つの御耳
をふり立くきこえしめも。志うちの高弓が京へ。代く唯一休
実事士といふべし。本舞台の正面に御神輿を舁時ハ。
よいくといふをのがれども。まいくと戯ふりのあし。繪馬や
楽屋の大幟よのぼりなる坂東の名物。実事芝居の福
乃神なり。

顔見せや　坂東一乃　當りこゑ　　蓼太

彦三祠
簑助稲荷 海邊風景圖
夕凪と
羅文

花にいふ風を己が琴にして松を動かぬ千代の立もの

高麗寺金井水　此水錦江山の麓より流れて末ハ市川の大河に入る。覗の光るみ常に立て。世人若人乃名水と賞嘆す。前ハ鼻佐峯に至く聳て。水中に畝岩あり。清鑑が洞。清玄が菴も此あたりに近し。昔智が城跡ハ殊に大きく高く。堂前に実悪武道明王を安置せり。犬神の祠ハ仁木が荒わしといふ家にして。髭の伊久が杖突の玉柳あり。秀鶴此ところの露が水の方に足を引く時盛を益用菜田とふ。

其柳や怨らむ時乃顔善云　蓼太

坂三津塔　此塔是業平里にありし塔の鼻柱なりとぞ。尾上の紋三法師再興の地にして。近ころ上手山乃坂上に移る。而后と

鴉啼屋角柳藏煙
一帶人家住水邉
最愛晴春三月暮
夕陽斜繫釣魚船

徐電

嵐山三八堂
坂三津塔
瀧野谷四楓

かるゝ村に。太刀売のたて煙草を売る家あり。其うちに擲鯉の彫物ありし。世にこれを其うちの擲鯉といふ。當麻は三役社なるの名所乃その一つなり。〇三役社のなかは国十楼乃なか手摩乃なかに坂ご廉のなか其之此塔のもとに萩咲て逢る

嵐山三八堂　上ぐるの古跡なし。宝晋斎其角が営乃子なる之はるゝと登たりしも此所なりとかや。六角堂乃桐紋門は三五楼傳来の山門なるん。神前の宝物體のふとり椰子ハ場がなくく去ざたれし。ふく井の清水に出塲を松乃古桑なりむかし其ゆと押のまく見物のうける所に。其上と云三字此額ハ八文字会の筆なりと云。

読人や　あふし　芝居紙をこりて　其角

瀧野谷四楓　此楓新車坊の庭にあり。坊の棒ぶ葉なり。むかし

薪車去人四つ柄を以て柱としてせしより。今業平の古跡となる。破れ小倉の菴今ハ畑となりて。五郎ハお虎が芥子を蒔く。水際乃ゝ行男山ハ常に女の狂言にありしも。光悦ハ落る瀧のやまりなく今の男女狎菴ハ二代の名にとおなじく。親の侍石ハ上にありと淋れ流りにあり。秀鶴英似銀の御親ハ此所より出るといふ。贔屓のつくりし山ハ桟敷の今子にみえて。評判乃よくいはれけしなり。わけ金六出の奥より色ほさて花ハ逆の客ぞとよこ茶ほめらるゝ　町中行くや　夕ともみち　紅葉

薬助稲荷　三大の正統。是業名人一体の大地あしく。坂東に三つ俤の二つり次ハ。親の名を光を増りて。出来只れ正一位。常附

徳治山（とくらやま）
大友社（おほとものやしろ）
うつほの木
ふくろのいちば

大谷のへうとう

浪子の氏神なり。抑是業名人ハ明和安永天明のころ是説を三
絵九舞台小密武る時ハ女と化しく道成寺乃地を拝とかうり。又
ある時ハ男と変じて愚蠢長低が因果を示めもその神其妙海円
ふ笑へり。今此篁助輪病。其のこゝろハいまだ小さき祠なれど。亀田
の三田八まんに勧請ありしが。先年御手洗が縁となりて具賀棒
中野しく。小山田太郎が麦畑を囲込て。清十郎が縁の並木
今ハ社頭の神木となれり巳未の冬再び三津五楼を建立せ

親に似たる人乃浮世やこ縁とえん　不知作者

徳次山　此山りつハ。大谷丸谷此谷間より遙くわうし此寄ハ山乃
猿を抱きり白雲ふ立つゝけし。姿見乃池意條ふ似く丸く。瀬戸物

とゝやさるに天明のころより社地荒廃に及びたりしを谷村の寅蔵院

是を嘆き表は名木の唐人羅紗裏は衛地の蝦夷錦を以神戸に代

造り諸人合佛の思ひを起しむその眞貝野しくあるし丁巳の

冬より新く八角興合てく歎然志て態闘むかしにふ増しぬ　巻中裁あり奈の宗十様門之

塩浜及び大友の社は蔵堂建立のときの常旨京浪速にも渡来をなし八十る各　江戸並

其の一大名所あり更に濃きへ之きの繁地ありしより輪廃の日を語りてくる事出せり

荒五楼新三弁井　むかし中村の久米路山乃桐変じく佐野

川の市松となる。此桐と松を伐く。遂に荒五楼此臺を造る剣

市川乃水を堰入まく。市紅花の呼井戸と名つく。これ我立役乃

堀かし井戸とす。

戯子名所圖會巻之二終

新撰

戯子名所圖會

且猻之号

人

戯子名所圖會巻之下目録

曲亭馬琴子編

路考臺
条三橋
野塩峠　金藏寺杜
扇蝶嶽
天王寺万菊畑
大竹屋夫
中嶋和田江
岩井山杜若堂
小佐川巨撰城　七藏砦
中山錦車菴
松本米山
瀬川路舟岸
藤藏院半堂
山科白十廬

桐谷鬼亭
鳥中嶋
宗十樓門壽堂

熊十字街
築地善江子

東岡舎羅文

路考臺風景

ゆひきの弁天堂
石橋の水上
花飛蝶駭不人愁
執着相生獅子頭
争發杜丹飜手扇
千秋萬歳於今謳
飯顆山樵夫題

路考堂　正徳年中の勧請王子は祈子古今娘の氏神なりとぞ。今
其むかし三代瀬川乃水上浜村に結縁あり見ハ無双の霊地也。
社頭数万株の菊花咲こぼれておのづから城の形をなせしより
世の人菊城と呼做せり。此所の神は俳諧の守にして踊は
判官建立の祠なり。当社古来より石橋獅子が祖神なるといへ
なる。此辺を牡丹に名づるし。同所に本田道成寺の旧跡あり。当
の鐘乃由来海内に鳴響く。今は芝居の千両箱に納まり女形の神
其庵室は田舎娘の案内にて知る。鷺娘の塚雪中に隠家なし
てらしろ面の比丘寺は此あたりに続けり。お杉久米三郎の宅地也。女
氏景の宮をさせてと後のよれ後山には、お初が古今ひ津部に

能も時代世話あらゆる習合の曲調いちぢるしくして信心の諸人踏寄大かた是招こと念ずると又堂なりしとぞ。当所は名物瀬川帽子諸芸茶の湯挿花結構。瀬川艾そのほかさまざま。正面乃額ハ東江流の能筆なり。

瀬川八景

女鳴神夜雨　道成寺晩鐘　石橋夕照　無間晴嵐

羽衣落雁　鷺娘暮雪　山姥秋月　高尾帰帆

咲かるむもの昔菜たずねきて是は蒔ちようちうち出れ浜　古歌

若井山杜若堂　本山ハ大坂四代の座元流なりしが。今ハ東都の名ハ不とたなりとく。松本七荘伽藍は宝物。市川流の大地なりて。且孫の

扇山
さとひらく
扇も雪の
立て出や
こしまり炉
風の
しをしき
桑揚子
久itの丁子
岩井山風景
条三橋
扇蝶嶽

惣本旹市川山の後見を兼帯せり。寺内に三ッ扇の芝なり。此辺を
扇町といふよし。口紅の融大臣の祠ハ。小山の産頭名神と崇めける。
七夏花の小町塚馬貝乃禿堂といふ蛍子院の傍をいふなり。
弟玉丸が下山乃古跡。定の井が子別れ涙摺。怪童丸が力石あり。
諸人ことの外知る所なる絶景にして。阿仙が三日月山の碑ハ今此道乃よ
なと称す。その外当所乃寄附霊宝を枚挙するに遑あらに擲
当所ハ不佑天皇乃勅願所にして。地蔵尊ハ古弘法の再興大和矢古丈
これに執とる由旧記にみえたり実不可思議の霊場なる那。謹而
無常の慈寛あり実相無漏の一幕をみてや是生滅法の大入なり。
流生観法乃見物を川く唯此山にして此妙ならて

此山蜒昌そ。九丈觸穢の癡眼を以て。何ぞ此好乃是非弦綸ぜん。

ふところに留彼紗にけり　杜若　挪居

粂三橋　杜若寺の内にあり。橋乃形振袖に似てあるき灑なり。此橋を袖が川といふ水上ハ岩井山ちとせ流まよひ出て見物人落る早瀬あり。親に正田の林あり。生弁天の祠あり。社内に総角大いちやうあり数多人とゞ猪る的場あり。

梅さくら花咲女乃那　王乃麻の紙

小佐川巨撰城　當城ハ前の小佐川太夫常世比後乱地蔵の冠者

小花川
巨撰城
五三の桐

中山錦車菴

たづね来る座敷多く乃梅柳

風羅老人

三蔦丸ユ丈の縄張みしく。古今不双の名城なり。前ハ妙音の立田川を堰入まで。うしろハ武道乃一ト筋乃を守るよく数万騎乃えあを引うけく。仕内を切幕のうちにめぐらし。何る事を八百八町の外に出す。小敵と見てあなどらば。大役とえく更に恐れず。阿古屋の松乃櫓天守。尾上は鐘の櫓をうけ。櫓三枚の櫓を突きるべく。光陰の矢束を防ぎ。敵役も恐れをなれ誠にお守まの古兵が。楯籠まする巨撰丈なりと。同所に七福が出丸の砦なりと。魚隣鶴翼の曲 此あるへく。長蛇昇天戦術の陣に似たり。

打かしのうちハ梅咲く。のどか山

仙水散人

野塩峠　當所ハ中村螢子院ありてお使の名不知して蘭耕山の峠と
山上に天王寺ありて。此邊矢車の廻り道多し。麓を中村といふ。此村
螢子院の舊地にして景色絶景なり。娘道成寺の種絵櫻七変
化の箱根池。女紅葉の切通若宮の併松が別荘。菅丞相より
御紀ハ手習鑑の山にありて竹抜五郎の社にハ柏莚肖像を
うつせる書画に福能寿の額ハ口紙にかくされてなく。
今の世も智不乃古跡なり。抑この野塩峠ハ。螢子一染の古跡
と掌に入りて眺望の高山にして。信田の葛の葉雪姫乃櫻
名木あまた茂り合て。道成寺接穂の櫻ハ昔の木風流をうつし
として妙なり。当所に金花寺の社ありて。いまも若木にして

のしおとうげ
野塩峠
まつもとのよねさん
松本米山
やましたのまんきくばたけ
山下万菊畑

寺なれバ。後にハ一本桜の大木となるべし。

中村の二友荷なかし出来乃よい天王寺や八分咲ハ名高き　傀儡子

中山錦車庵

大見山ぞはやく北野まさり。石の棒志けらしく。

床にかけたる無極ハ。今を日の出乃立物めしく。月のあれ木お隠

下菊らしく。水際のへりぞ々て小挿入し。根よ一挺の石燈籠を

立かけたり。庭ハこせつかずして。おまへの築山を見をはじめ八ツ段

のきそへ川を堰入し。定紋の桐戸乃傍にハ。色段のこばま一社

咲ぶれ。田の立まりを奥ふかく見へて。人好れもる風景なり

色段と上手紙ひとつ道なし。た館を傍なる小庭の中山　傀儡子

扇蝶ヶ嶽

岩井山の末より出て。山の勢もすらと高く。奇麗めしく

見ところのある景色なり。此山をはじめハ荊藻峠といへり。今俗
あいふ稀代左山と唱て。此辺の人ハ通町の左ま山とも呼做
せり。師道の蕉門および俳の修行坂を登りべ。凡拙の声試掛
梯かゝりく猿せず移り。

すゞしく帰りがけとて扇や雲の峯　風羅翁

松本米山　此山小次の松鶴山よりつゞれて。今一名を瀧卿山と
号をむかし子役乃観音堂ありし時。此寺籠の奉納松より
けふ山端ま名高くありて。今ハ松本の文車寺を建立せり。
巖の谷ありつ。ふこく此清水てふれたてて御敷を枝の立
本多し。

大竹やぶ
二うい堂の松
山しかのつく

この人ね
晋子
山科白十盧
中嶌和田江
桐谷鬼亭
熊十字街
烏中嶌
築地善江寺

詠ぐもくに入し文車に巴合せのよき手本なり
天王寺万菊畑　山下金作堂根分け畑。大坂にして名高く
おしよく天王寺の株をうしなひぞ。ふ芽に桂の手入あらば
忽ち江戸の土にあふぐ。芳き名を揚んこと。又来る秋を待まち。
菊はくく芽をかへしてるし　うれ　嵐亭
瀬川露丹山岸　當所は瀬川菊水の流にして此岸に雄次
藝の揚り場あり。振袖乃帆掛船ふみえへくおし出し
のよん風景なり。
きくによく似るとあり　見乃草
大竹屋丈　此薮沢村音江より出る竹のふなきりしが近年に

藝の実が入て。實悪班の大竹となれり。世の口號に一昔抔で
く。古人の所謂野夫なと切乃者を見るべし。

藤藏院半堂　後飛院へとじめ萩野より。今ハ宗旨を
久く沢村に移る。半畳の池まで川合せ蛙多く住て。當
世に稀の大木あり。

中嶋和田江　當所ハ中野三甫北松原より出て。公家悪皇
子抔と撰乃地なり。江戸生世の名木天幸寺二階笠の松。今
ハそれ声太平楽を奏するに似たり。

山科白十盧　切者上人閑居の菴にして。至極悉つなる風
景なり。當所に於く。仕られ大むりしよつふ名作家を感じ

伴久のさげ柳
八の字の鳩
五人桐

楸樹馨香倚釣磯
斬新花蘂未應飛
不知醉裏風吹盡
可忍醒時雨打稀
杜少陵

〻爺〻婆〻をよくまもることなり。

桐谷鬼亭　此亭ハ毘沙門堂に建る家を止めハ大谷中村の中通りにありしが今ハ独立乃放れ門となる。庭輔の指物哉者用にして年々一振にて上りの見ゆる三階造なり。

熊十字街　秋暁坂の古跡とかけにけ不かを踏る。当所正月山よ二ッ石の礎を止て暁をあつるより男弁を八をこしく苦れ付を穏せり。

鳥中嶋　此嶋正徳のころ。鳥動出つ築立る名所なりしが今八幡ハ名のこを揃をとす。色し天明の比まで市川の流れに立し。小三山として山の中色今此演れ説となりしが特別に説あり

築地善江子　坂東三十三所のなれてふしく。名の聖つる舊

踊から出ゐを笑せる。此中に曲ん遍の念仏堂あり。戒壇に一片の石を建て則六字を彫付たり。書して曰許群集入拱盤

宗十樓壽臺

紀伊國山沢村の内にあり。てじめ助高藪高助屋鋪乃古跡めしく。今まて四代古今ふ可思儀の旅宗なり。旅宗の水上ま納子大鳥名神の祠あり。排体々當時大立物武道浪子命にししく外に仕への内陣ハ足利形萬比再興清盛入道の像を安置を。社頭に梅野与四兵衛の頭巾石あり。世よ宗十樓の頭巾石といふハ是なり。傍に伊久寂物乃黒髭の柳ありて。旁ハの文字塚此所の名所なり。後世伊久黒髭の柳を挿ることの。又この辛を接木なりといふ大星由良乃湊盗賊石川此渡ハ當时ふ叙は

古蹟とする。忠信が鞁の旗。知盛は薙刀岩ハ千本松の並木に名高く。扨て幕を桐の紋章ハ真似人乃団侍の旧地なり。妹背山より大判湯を見かけし。蓬屋の里に保業畑をみるくらん。大内の夕霧に。蘆汁の浦は眺望ハ風流第一の言興多し。中にも当所ハ名物薩摩國府に五人切りしたてたぐどもハ古今未曾有の評判高く。千両箱の於話乃本店。極上と名の名葉といふべし。

薩摩國府なでと又よ紀五人切りぎる者の咄し　浅村の名　傀儡子

戯子名所圖會巻之下　大尾

馬琴老人性耽著作雪案螢窗吮筆
不輟近日觀新編冊子竊倫輩先
生之術釀研底于一書戲場一種
天地忽然拈出山川之肺肝草木之
部目無嬰造化之機奇新可驩
工描作圖漆護清景貴介公子矣
勝換梨園之遊至翁園果如何

湖上再来之笠翁子
旹己未霜月朔纂二于洛橋之南
垂柳渓芟二一山東子之茅

江戸　京山戴